

## 人迎気口診の推移 2010/06/06 吉岡広記

### はじめに

歴史上の人迎気口診は、『脈経』巻一・両手六脈所主五藏六府陰陽逆順第七に引かれる『脈法讚』の記述「関前一分、人命之主。左為人迎、右為気口」を嚆矢とするも、北宋に至るまで顧みられることはなく、南宋代に隆盛したと見られるが、その後の展開は不明な点が多く、その推移を検討した。

### 人迎気口診の捉えられ方

北宋以降の人迎気口診の推移を見る上で重要なのは、その捉えられ方である。それを左右するのは『内経』以来の古い人迎脈口診と『脈経』以来の新しい人迎気口診との関係性をどう考えるかという視点である。両者の異同（診脈部位名の一致と位置の相違）に対する問題意識と言っても良いが、要するに人迎気口診が成り立つか否か、さらに突き詰めれば左関前一分を人迎とすることの正否が問題となっている。

以上の観点より整理すると、敷衍、曲解、否定に分類できる。結論から言えば、人迎気口診を人迎脈口診とは無関係に展開するに該当するのは、『三因方』を著した陳言のみであった。その余は人迎脈口診に拘泥し、それを以て人迎気口診を正当化する（それも人迎脈口診を人迎気口診として読み換え、無理にでも整合させる）か、あるいはそれを以て人迎気口診を否定するのいずれかに分かれる。なおとに共通するのは、人迎脈口診と人迎気口診を別の脈法として併存させることを許さなかったことである。

### 人迎気口診の推移

北宋以降の推移は、その捉えられ方により、大きく 北宋の再出、南宋の隆盛（敷衍）、金の曲解、明清の否定の四つに区分できる。

**北宋の再出：**『活人書』巻二・脈穴図に診脈部位の解説がある。人迎と気口を左右の関前一分と位置づけ、その意味づけに『内経』以来の人迎脈口診を以てし、正当化を試みた。本巻の冒頭に『靈枢』五色を僅かに変えた一文「治傷寒、先須識脈。…人迎緊盛〔『靈枢』「緊盛」乙〕傷於寒、気口緊盛〔『靈枢』「緊盛」作「盛堅」〕傷於食」を置くことから明らかである。

なお、援用された人迎脈口診は、『靈枢』四時気「気口候陰、人迎候陽也」や禁服「寸口主中、人迎主外」が示すように、頰（人迎）と手（脈口）で陰陽内外を診るが、人迎気口診は気口を左手（陽・人迎）と右手（陰・気口）に分けて診るため、人迎の診脈部位名の一致と位置の相違についての説明が要る。朱肱は、気口と俱に「属手太陰肺之經」とし、寸口（脈口・気口）中に設けることを是とした。

これについて南宋の楊士瀛は、診脈部の名と位置を正当とするにはなお理由があると考えた。『仁齋直指方』巻四・論肝脾主病<sup>1)</sup>で、人迎と近接する左関の肝は風寒を、気口は右関の脾が食を主るためと解し、『靈枢』五色を人迎気口診として明確に読み換えることで解決させた。

こうした両者の異同の問題視は、後に李東垣の人迎気口診の曲解、張介賓や李延是、呉謙の人迎脈口診に基づく批判に繋がっていく。

**南宋の隆盛（敷衍）：**陳言は、本格的に展開した唯一の医家で、『三因方』巻一にその成果がある。人迎を「以候六淫、為外所因」、気口を「以候七情、為内所因」と定義し、浮沈遲数の四脈または二十六脈を人迎と気口で診ることで内外傷を弁別する範型を作った。その後は『普濟方』（巻一）が引くのみで、それ以上の展開は何もなく、中国での影響はほとんどなかったと言って良い。

**金の曲解：**『内外傷弁或論』巻上・脈弁では、人迎脈口診を取り込み「人迎脈大於気口為外傷、気口脈大於人迎為内傷」と定義し、一方に対し強さが一～三倍である時の脈證を示す。『仁齋直指方』（巻六・弁脈法）『永類鈴方』（巻一・診候六脈入式之図）『普濟方』（巻四・内外傷論）『玉機微義』（巻十八・弁脈法）『脈語』（巻二・人迎寸口）『雜病證治準繩』（巻一・寒熱門・発熱）等に引かれ、『名医類案』や『赤水玄珠』（巻十九・内傷似外感始為熱中病）の一部に運用が認められる。別の脈法である両者を一緒にする李東垣の論は、牽強付会も甚だしく曲解と言わざるを得ないが、この事実は、人迎気口診のみを推し進めた陳言の論より評価の高かったことを示している。

**明清の否定：**『景岳全書』巻十六・勞倦内傷・弁脈<sup>2)</sup>では、人迎脈口診を根拠に、人迎はそもそも足陽明（頰）に位置するもので、気口（寸口・脈口）にあるというのは誤りとして、東垣の論と俱に人迎気口診が否定される。『脈訣彙弁』巻二、『医宗金鑑』卷三十四・四診心法要訣<sup>3)</sup>もほぼ同論である。

〔使用版本一覧〕

『靈枢』：明刊無名氏刊本、日本内経医学会1998年影印	『永類鈴方』：元至順間刊本、人民衛生出版社2006年排印
『脈経』：南宋何大任刊本、『東洋医学善本叢書』第七冊、オリエント出版社1981年影印	『玉機微義』：明正徳元年刊本、龍谷大学大宮図書館写字台文庫蔵
『増註傷寒類證活人書』：医統本、集文書局1980年影印	『脈語』：明万曆友益齋刊本、上海書店1986年影印
『三因方』：南宋刊本、『東方医学善本叢刊』第四冊、オリエント出版社2001年影印	『證治準繩』：明万曆本、上海科学技術出版社1959年影印
『内外傷弁或論』：東垣十書山本長兵衛刊本、『和刻漢籍医書集成』第六輯、エンタープライズ社1989年影印	『景岳全書』：岳峙楼本、上海科学技術出版社1959年影印
	『脈訣彙弁』：清康熙五年刊本、新文豊出版公司1985年影印
	『仁齋直指方』、『普濟方』、『赤水玄珠』、『名医類案』、『医宗金鑑』：四庫本、上海古籍出版社1991年影印

\*1 「経曰、人迎緊盛傷於寒、気口緊盛傷於食、蓋肝脈可以知風寒之出入、脾脈可以驗飲食之盈虧」

\*2 「夫人迎本陽明胃脈、在結喉兩旁、気口本太陰肺脈、両手所同称也。迨晋之王叔和、不知何所取義、突謂左為人迎、右為気口、左以候表、右以候裏。而東垣宗之、故亦以為言、則大謬矣」

\*3 「左関一分、名人迎、肝胆脈也。肝胆主風、故人迎緊盛主乎傷風。右関一分、名気口、脾胃脈也。脾胃主食、故気口緊盛主乎傷食。此創自叔和、試之於診、每多不応、然為後世所宗、不得不姑存其說、觀内経以足陽明胃經頰上之動脈為人迎、手太陰肺經高骨之動脈為気口、足知其謬矣」

## 242

## 人迎氣口診の推移

○吉岡 広記  
吉岡鍼灸院

【緒言】歴史上の人迎氣口診は、『脈経』巻一・第七に引かれる『脈法讚』の記述「関前一分、人命之主。左為人迎、右為氣口」を嚆矢とするも、北宋に至るまで顧みられることはなく、南宋代に隆盛したと見られるが、その後の展開は不明な点が多く、その推移を検討した。

【北宋の再出】『活人書』巻二・脈穴図に診脈部位の解説がある。朱肱は関前一分と位置づけるも、『内経』の人迎脈口診との違いを埋め擦り合わせようとする。本巻の冒頭に『靈枢』五色を僅かに変えた一文「治傷寒、先須識脈。…人迎緊盛傷於寒、氣口緊盛傷於食」を置くことから明らかである。人迎脈口診は『靈枢』四時氣「氣口候陰、人迎候陽也」や禁服「寸口主中、人迎主外」が示すように、頰（人迎）と手（脈口）で陰陽内外を診るが、人迎氣口診は左手（陽）と右手（陰）で診るため、寸口中（陰）の人迎を陽とするには理由がある。氣口は『素問』五藏別論の「五藏六府之氣味、皆出於胃、變見於氣口」を引き内を候うと意味づけ、人迎は病能論「人迎者胃脈也」を根拠に太陰だけでなく陽明にも属すとし、陽を候うことを暗に示す。南宋の『仁齋直指方』巻四・論肝脾主病では、人迎と近接する左関の肝は風を、氣口は右関の脾が食を主るとし、『靈枢』五色を人迎氣口診として明確に読み換える。こうした問題意識は、後に李東垣の人迎氣口診の曲解、張介賓や李延是、呉謙の人迎脈口診に基づく批判に繋がっていく。

【南宋の隆盛】陳言は、本格的に展開した唯一の医家で、『三因方』巻一にその成果がある。人迎を「以候六淫、為外所因」、氣口を「以候七情、為内所因」と定義し、浮沈遲数の四脈または二十六脈を人迎と氣口で診ることで内外傷を弁別する範型を作った。その後は『普濟方』や『證治準繩』等が引くのみで何ら展開はない。

【金の曲解】『内外傷弁或論』巻上・脈弁では、人迎脈口診を取り込み「人迎脈大於氣口為外傷、氣口脈大於人迎為内傷」と定義し、一方に対し強さが一〜三倍である時の脈證を示す。『仁齋直指方』、『玉機微義』、『脈語』、『證治準繩』等に引かれ、『名医類案』や『赤水玄珠』の一部に運用が認められる。

【明清の否定】『景岳全書』巻十六・勞倦内傷・弁脈では東垣の論と俱に人迎氣口診が否定される。『脈訣彙弁』巻二、『医宗金鑑』巻三十四・四診心法要訣下もほぼ同論である。

## 訂正抄録

【緒言】歴史上の人迎氣口診は、『脈経』巻一・第七に引かれる『脈法讚』の記述「関前一分、人命之主。左為人迎、右為氣口」を嚆矢とするも、北宋に至るまで顧みられることはなく、南宋代に隆盛したと見られるが、その後の展開は不明な点が多く、その推移を検討した。

【北宋の再出】『活人書』巻二・脈穴図に診脈部位の解説がある。朱肱は関前一分と位置づけるも、その意味づけを『内経』の人迎脈口診との違いを埋め擦り合わせようとするを以てし、正当化を試みた。本巻の冒頭に『靈枢』五色を僅かに変えた一文「治傷寒、先須識脈。…人迎緊盛傷於寒、氣口緊盛傷於食」を置くことから明らかである。援用された人迎脈口診は『靈枢』四時氣「氣口候陰、人迎候陽也」や禁服「寸口主中、人迎主外」が示すように、頰（陽・人迎）と手（陰・脈口）で陰陽内外を診るが、人迎氣口診は氣口を左手（陽・人迎）と右手（陰・氣口）で分けて診るため、寸口中（陰）の人迎の診脈部名の一致と位置の相違についてを陽とするには理由がある説明が要る。氣口は『素問』五藏別論の「五藏六府之氣味、皆出於胃、變見於氣口」を引き内を候うと意味づけ、人迎は病能論「人迎者胃脈也」を根拠に太陰だけでなく陽明にも属すとし、陽を候うことを暗に示す。朱肱は氣口と俱に「屬手太陰肺之經」とし、寸口中に設けることを是とした。これについて南宋の楊士瀛は、正当とするにはなお理由が要ると考えた。南宋の『仁齋直指方』巻四・論肝脾主病では、人迎と近接する左関の肝は風寒を、氣口は右関の脾が食を主ると解し、『靈枢』五色を人迎氣口診として明確に読み換えることで解決させた。こうした両者の異同に対する問題意識は、後に李東垣の人迎氣口診の曲解、張介賓や李延是、呉謙の人迎脈口診に基づく批判に繋がっていく。

【南宋の隆盛】陳言は、本格的に展開した唯一の医家で、『三因方』巻一にその成果がある。人迎を「以候六淫、為外所因」、氣口を「以候七情、為内所因」と定義し、浮沈遲数の四脈または二十六脈を人迎と氣口で診ることで内外傷を弁別する範型を作った。その後は『普濟方』や『證治準繩』等に引かれるのみで何ら展開はない。

【金の曲解】『内外傷弁或論』巻上・脈弁では、人迎脈口診を取り込み「人迎脈大於氣口為外傷、氣口脈大於人迎為内傷」と定義し、一方に対し強さが一〜三倍である時の脈證を示す。『仁齋直指方』、『永類鈴方』、『普濟方』、『玉機微義』、『脈語』、『證治準繩』等に引かれ、『名医類案』や『赤水玄珠』の一部に運用が認められる。

【明清の否定】『景岳全書』巻十六・勞倦内傷・弁脈では、人迎脈口診を根拠に東垣の論と俱に人迎氣口診が否定される。『脈訣彙弁』巻二、『医宗金鑑』巻三十四・四診心法要訣下もほぼ同論である。

【附・結語】人迎氣口診を人迎脈口診とは無関係に展開したのは『三因方』を著した陳言のみであり、その余はいずれも人迎脈口診に拘泥し、それを以て人迎氣口診を補強する（それも人迎脈口診を人迎氣口診として読み換え、無理にでも整合させる）か、あるいはそれを以て人迎氣口診を否定するかで、両者を別の脈法として併存させることは許さなかった。要するに、『内経』以来の古い人迎脈口診と『脈経』以来の新しい人迎氣口診との関係性をどう考えるか、ということでその態度が変わるのである。